

《シンポジウム》物語以前・物語の誕生・物語の変容

——朝鮮半島の口頭伝承研究の現段階

松原孝俊

はじめに

本特集は、第三五回研究例会（一九九八年三月一四日開催）で発表してくださった永井・真鍋・矢野の三氏の口頭発表を整理・加筆したものである。

さて本特集は、二つの狙いで組み立てられている。一つは、日本人研究者による「朝鮮半島の口頭伝承研究の現段階」を提示することである。これまで日本における研究は依田千百子氏の孤軍奮闘の活躍で支えられ、または崔仁鶴氏をはじめとする日本語に流暢な韓国人による研究紹介で大過なく過ぎてきたのである。しかしながら韓国の学界にしても世代交代が進み、もはや日本語を解しない「ハングル世代」が主流を占めている現状では、我々自身が韓国語に習得しない限り、日本で気楽に待ち続けていても韓国の良質な研究情報は入手できなくなってきた。ソウル大学出身者を中心として組織された「韓国口碑文学会」などによる研究蓄積が、その例である。

本特集に参加した三名の研究者はそれぞれが韓国語を解し、韓国の研究動向に精通し、しかも長期間にわたる韓国での豊かなフィールド経験を有する方々である。この気鋭の三名の研究者が、いかなる問題意識を持ちつつ、何を論じているか、などに注目していただきたいのである。

もう一つの狙いは、「口承と書承の相互作用」の解明である。そもそも統一テーマは「物語以前・物語の誕生・物語の変容」であるが、研究例会開催以前にこのテーマをめぐって四名で入念な話し合いの場は一切設定しなかった。ひとえにコーディネーターである松原が発表者三名の現在の問題関心と研究対象を熟知した上で、独断でテーマを決定した。各発表者にしても松原との綿密な連絡を保ちながらも、相互没交渉であったために、研究例会当日に残りのお二人の発表を初めて聞いたと述懐なさるほどであった。

しかしながら韓国盲僧集団内において、視覚障害者でありながらも晴眼の助力を得てカタリの手書承化をなしとげ、しかも、その統一化・標準化されたテキストがさらに口承文芸の世界に拡散していく

様相を見事に分析した永井氏の所論。そして口承と書承のせめぎ合いの中で誕生する殉教者「全泰壹」物語を解析した真鍋氏の所論は、それぞれに見事に照応する内容の発表であったし、それを活字化した読み応えある力編が本特集に寄せられたのである。

なお本特集の中での矢野氏の論考は、研究例会における発表内容とはいささか異なるものである。すでに『伝え』の最新号で簡略に紹介したように、矢野氏の関心は、社会の価値観の変遷に伴って物語がいかに変容するか、また地域伝承の記録者や再話者の価値観や目的意識、採録者や研究者の先入観などによって、物語の内容が故意あるいは無意識的に取捨選択されたのではないか、という点にあった。つまり口承から書承へ、さらには書承から口承へと移行す

るとき「押さえ所」を教えるものであった。その点では、統一テーマに合致する内容であった。本特集における矢野氏の論考は、その延長線上にあることを知った上でお読みいただければ、幸いである。

なるほど本特集で口承文芸研究における「口承と書承の相互作用」が全面的に解決したとは言えまい。それでもダイナミックな「口承と書承の相互作用」がカタリを揺り動かし、さらにカタリが「読み」を生み、そして豊かな文芸の世界を創出していく一つの様相は、読者諸氏の期待に応えるものとなったのではないかと愚考する次第である。